

## ◆コーディネーター

川管理者の取り組みはもちろん、住民側の取り組みの重要性を指摘したい。水害の危険

防・減災については、河

また、洪水常襲地帯だったからこそ、住民は荒川上流部改修の必要性を深く理解できたのだと思う。

荒川の歴史を振り返ると、流域の暮らしは洪水とともにあって、私たちは共存する知恵を持っていた。そして、現在でも、私たちの生活や暮らしに潤いを与えてくれる環境などの面から、荒川と深くかかわっていることが、意見交換を通して共有できた。



田中規夫氏

埼玉大学大学院理工学研究科教授

## 情報を取捨選択する力磨いて

が迫った時に取るべき行動を時系列で整理しておくタイムラインを作成するなどして、住民自身が迅速で適切な避難につなげてほしい。

荒川の未来へ向けては「つながり」という言葉がふさわしいと感じた。荒川を軸とした生き物のつながり。上下流のつながりは観光にも生かせる。防災活動を担う町内会の基礎は人のつながりだ。

それについて、意見交換では多様な視点から提言をいただいた。考えてみると、これらを貫くのは情報だ。

未来へ向けた荒川づくりには行政、流域の住民や企業などが連携して取り組み、それぞれの立場で情報を発信することが大切だ。情報を受け取る側には、その中から正しい情報を取捨選択して判断することが求められる。その能力を磨くことも大切だと思う。